

極度の母子分離不安を示した4歳男児の遊戯療法

坂本 歩^{*}・松島恭子^{**}

Play Therapy of a four-aged boy who had extreme anxieties of separation from mother

AYUMI SAKAMOTO and KYOKO MATSUSHIMA

は し め に

ここに報告する事例は、母親と離れると自家中毒を起こすという極度の母子分離不安を示した4歳男児（Y）の心理治療過程である。母親は49歳という高齢で本児を出産しており、自分自身の健康への不安とともに、未熟児での出生による抵抗力の弱さから通院に明け暮れる本児の状態への不安が重なり、非常に不安定な状態に陥っていた。このような母親の不安が子供に伝わり、子供の不安が母親を余計に不安定なものにさせるといふ悪循環が、この母子の分離不安を深めていったのではないかと著者らは考えた。

このプレイセラピーでは、両者の不安を取り除き、より良い母子関係を築きあげることが目標に置き、そのためにY自身の自我発達を促し、Yの母親に対する意識を変化させながら、母子分離を経験させていくことを治療課題とした。以下ではこの心理治療過程を報告し、(1)Yと母親の母子分離、および(2)Y自身の自我発達、の2つの視点から、それらの展開の過程についての考察を試みたいと思う。

なお、本事例は母親面接を松島が担当し、Yのプレイセラピーを坂本が担当した。治療過程において毎回のセラピーのスーパービジョンを松島が担当し、結果は両者の協議により考察した。

I. 事例

<1> 治療対象

(1)クライアント；Y. K. 3歳7カ月（来談当時）

(2)主訴；極度の母子分離不安

(3)プロフィール；父51歳、母54歳の3人家族。在胎34週で生まれ、生下時体重は1640g。生後1カ月半まで保育器に入っている。生後3カ月で退院。定額3カ月。座位6～7カ月。四ツ這い10カ月。つかまり立ち9カ月。歩行1歳1カ月。人みしりはなく誰にでも愛想をふりまき、「かわいいねえ」と言われると、鏡を見て確認していた。2歳くらいから極度に分離不安を示し、ベビーホテルに預けられた2歳4カ月には自家中毒を起こし、入院する。その後も水痘・麻疹などで入院する。一時期離乳していたが、麻疹の時に復活し、結局3歳3カ月まで母乳を飲んでた。

周囲には子供は少なく、近所にいるある特定の2人とだけ遊ぶ。両親によれば、年中病院通いをしており、特に風邪にかかりやすく、抵抗力が弱いようである。夜泣きも激しく寝つきも悪かった。

母親は49歳の高齢ということで、かなり無理をして本児を産んでおり、出産後には3カ月入院している。更年期ということもあり病院通いをしたが、本児が診察室へついてくるため治療を断われている。本児の夜泣きの激しさで夜もぐっすり眠れず、かなり疲労も蓄積している様である。

また本児が親離れしないのをみて、近所の人から「年よりの子供はダメになる。」と言われて、かなり気にかけており、それが不安の種になっている。

なお本児は遊戯療法終了後、63年4月より幼稚園に通園している。

<2> 治療方法

* 大阪市大生活科学部児童学科1987年度卒（現：四天王寺悲田院通園施設）

** 大阪市大生活科学部児童心理

期間は昭和62年4月15日から12月11日までの22回。原則的には週1回50分間。場所は大阪市立大学生活科学部のプレイルーム（以後p. r. と略す）を使用。またこのケースは母子分離不安という特殊な問題であるので、初めは敢えて母子同室とし、子供とセラピストのプレイ、および母親カウンセリングを同室で実施することを試みた。その後段階を経て、母子別室でプレイセラピーとカウンセリングを行なった。

母子同室についてであるが、プレイセラピーを行なう際に大切なことは、ラポート（親和感）の形成であると考えられる。このケースの場合、早急な母子分離はラポートの発展には結びつかないであろうし、また母子を一つの「共同体」として受け入れる必要があると考えられる。結果から見ればその事により母子分離がスムーズに行なわれたともいえる。



図1. プレイルーム見取り図

- Y Y児
- Th セラピスト
- Co カウンセラー
- Mo 母親（又は父親）

<3> 治療過程

(1) 第1期（1～3回）

〔第1回 4月15日〕 < >Th, 「」本児のことは両親と共に来談する。第一印象はおとなしそうな色白の男の子。父親の手を握りしめている。なかなかp. r.（プレイルーム）に入ろうとはせず、全員に促され、再

度Fa（父親）に促されやっと入室する。入室後もしばらくは「帰ろう」とFaの手をひっぱる。Th（セラピスト）はどのように働きかけるか悩んだが、最初はFaも一緒に遊んだせいかなと思ったよりもスムーズに遊びが始まる。

Yが興味を示しそうな物をいくつか提示すると、箱庭に興味を示し取り組む。途中でFaが遊びから抜けてカウンセリングに加わると、人形などを並べながらも目の端でFaとMo（母親）を追っている。Thの問いかけに対しては「これ何?」<「怪獣」といったような必要最少限のことしか言わない。その後、パチンコ、プラレールへと興味は移り、タイムアップとなる。Thの<バイバイ>には返事はしないが、満足した様子で帰って行く。思ったよりもスムーズに遊べたのでThとしてはひと安心でプレイを終わる。

〔第2回 4月22日〕

Moに手をひかれ、うれしそうに入室する。自ら「今日はいっぱい作んねん。」と意欲を見せる。まず箱庭へ向かい、ピンクのテーブルを置き、ドラえもんや猫の人形を向かい合わせに座らせる。この人形は前回は好んで使用している。箱庭に飽きると「今度はこっちで遊ぶ。」とプラレールの方へ行き、Yが遊びの主導権を握る。プラレールに使う人形を探しに行き、見つけたドンケツゲームで遊び始める。1人でボタンを操作していたので<お姉ちゃんと一緒にしよう>と誘うとThにボタンを1つ譲る。ゲームに飽きると再びプラレールに戻り、線路を拡張し、無言で電車を走らせる。終了を告げると少し残念そうな顔をする。プレイの最中は同室しているMoの方へ行くことはないが、Moの声を聞きながら安心して遊んでいる様に見受けられる。<さようなら>と言うと、Moに促され「さようなら」と言いながら手を振って帰って行く。

〔第3回 5月6日〕

最初は入室を渋るが、<マットがあるよ>と誘うと入室し、マットの方へ歩み寄る。大きな布積み木を全部積み重ねると興味はなくなる。次に箱庭の方へ誘うと前回用いたドラえもんや猫の人形をずっと手に持って、木などを並べる。かごの中から木を探し出している時に、足踏み式の空気入れを見つけ、手で押す。Thが代わりにビニールのおもちゃに空気を入れることに熱中している時に、どこからか「ヘビ」を見つけ出し、Thに見せる。Thが驚くとそれを箱庭の中へ置く。箱庭に飽きると砂遊びを始める。

砂遊びではThのする事を模倣したり、Thの言葉を繰り返したり、また水を使用するなど、遊びにも広がり

が見られる。ヘビの登場と共に今回で箱庭は終了し、次回から箱庭はYの興味の対象外となる。今回は終了を告げるとすぐに遊びをやめMoの元へ行く。Moに促されると「ありがとうございました」と言って帰って行く。

この日初めて母子分離を試みる。プレイ開始後30分でMoが「お母ちゃんおしって行ってくるから待っててくれる?」と尋ねると、Yが「うん。待っててあげる。」と返事をし、MoとCoは退室する。その間パニックを起こすこともなく、時折ドアの方を見ながらも淡々と遊んでいる。約5分後、MoとCoが入室する。うれしそうな顔はするが、Moに走り寄って行くことはなかった。初の母子分離への試みはまず成功であったが、どちらかといえば拍子抜けの感があった。

(2) 第2期 (4~7回)

〔第4回 5月15日〕

自ら進んで砂場へ行き、砂遊びをし始める。前回と同じ道具を使用し、それにこだわるなど物に対する所有欲を見せ始める。初めに一度水をくんでやると、その次からは「水」とThに要求するようになる。最初は少しずつ水をこぼしていたが、徐々に大胆になる。また自分で作った山を自ら崩して喜ぶ。終了後は生き生きとした表情で帰って行く。

〔第5回 5月22日〕

水道の下に台を置いてやると、自分で水をくむようになる。プレイ開始後30分、Moが「Yちゃん、ちょっと行ってくるけどいい?」と尋ねると、しばらくの沈黙の後「いいよ」と答える。MoとCoが退室するが、砂遊びに熱中し、気にかけている様子はない。特に水をかけて山が大きく崩れるのを見て、「キャッキャッ」と初めて声を出して笑った。Moが入室すると顔が輝くのがよくわかる。帰り際にはMoの「ありがとうございました」に促されてひざにつくくらい頭を下げてそのままの格好で退室し、歩いて行く。

〔第6回 5月29日〕

p. r. のドアを開けるのをうれしそうに待っていて、開けるや否や飛びこんで行く。Coが「おかあさんと散歩してきてもいい?」と尋ねると、首をふっていやがり、Moを中へ入れようと手をひっぱりに行く。Moが入室すると、安心したように遊び始める。

布積み木を全て積み上げると、砂遊びを始める。自分で水をくみに行ったりしながら、山や川を作っていく。10分後、再びMoが「Yちゃん、お母ちゃんちょっと行ってくるわ。」と言うと、「あーい。」と大きな声で返事をする。MoとCoが退室後も遊びに熱中し、ままごとセットなどを使用しながら砂場で遊ぶ。泥水をコーヒー

にみたて、砂の砂糖を入れたり、砂をふりかけにみたてで、ごはんの上に撒いたりする。Moの再入室でプレイ終了。終了の合図には素直に従う。Moにあいさつを促されてもわざとしないで後ろに手を組んで帰る。

〔第7回 6月5日〕

機嫌よく歌を歌いながらやって来て、うれしそうに入室する。布積み木を、「これ建て物」と言いながら並べ積み重ねていく。全部積み重ねてしまうと、電車に興味を持ち、2両、3両とつなげていく。それからプラレールの線路をつなぎ始める。

約5分後、Coが「ちょっと散歩に行ってくるわね。」と言うと、Y「はい。」Mo「ここにおってや。」Y「おる。」MoとCo「行ってくるわね。」Y「はい。」と答え、再び電車に熱中する。MoとCoは退室し、終了時まで再入室はないがYは少しも動揺は見せない。

Thが持っていた電車を走らせようとする、Yが「お姉ちゃんのはこれ。」と、Thの手をとって渡してくれる。Thが「出発! ガタンゴトーン…」と言いながら電車を走らせていると、いつの間にかYも同じ文句を口にしながら遊んでいる。Thの電車に追いこされるのがいやなようで、追い抜かれないようにしようと必死の形相である。「お姉ちゃんもうすぐ終点やなあ。」などと、Yの方から話しかけながらプレイが進行する。Thの電車が終点の場所へ来ると、「お姉ちゃんのはここから。」などと指示をする。

濃みない会話が成立するようになった。終了を告げると、まだ名残り惜しそうな素振りを見せ「Yちゃんも片付ける。」と言う。今回は「どうもありがとうございました。」と、きちんとあいさつをして帰っていく。

(3) 第3期 (8~16回)

〔第8回 6月12日〕

大学へ来る途中の電車内で会うが、いつもの快活さはなく口を開こうとしない。しかし、p. r. へ来ると明るい表情で迎えてくれる。入室直後にMoが「お母ちゃん、ちょっと先生と勉強してくるわ。」と言うと、Yは「おる」と言い、最初からの母子分離に成功する。

Mo退室後も特に変化はない。布積み木を1つずつ「これは木。これも木。」と説明しながら並べていく。この日3段(Yの身長よりも高く)積めるようになった。しばらく箱庭をするが、すぐ砂場の方へ興味を移す。Yがバケツの水をこぼしながら「雨だあー」と叫ぶので、Thはジョウロで「雨ですよー」とバラバラと水を撒く。Yはそれを模倣し、自らもジョウロを探し出し「雨だあー」と言いながら水を撒く。トンネル・道路を作り、車を走らせる。その車をThがさわろうとすると、手で払

いのける。Thが通りやすいように別の方向に新しい道を作ると、最初は不機嫌そうな顔をする。しかし、それが通りやすいとわかると無言で車を走らせる。その間Thはただ見ているだけである。終了すると自ら進んで「ありがとうございました。さようなら。」と言い、何度も両手をふって「バイバイ」と言いながら帰って行く。
〔第9回 7月3日〕

両親共に来所。Thが「元気やった?」と尋ねると、元気ではなかったのに「元気やった。」と答える。入室直後にMo・Fa・Coが退室することを告げると、「いいよ。バイバイ。」と手をふる。

砂場でYが山と川を作るのに熱中しているの、Thがスコップで丸い型をぬいておく。偶然Yがスコップで同じ型を作る。そしてそれを手で壊して楽しむ。その後、おもちゃ箱の中から汽車の型をとり出し、その型をぬき「シュッポできたあー」と喜ぶ。しかし、これもすぐにつぶしてしまう。Thが車の型で型ぬきをしていると、交換するように要求する。Yは自分で作っては壊すということを繰り返す。最後にはThが作った型を片っ端から壊していく。Thが負けまいと多数作った型も全て壊してしまう。最初は一方の型の上に異なる型ぬきを置いていくだけであったが、徐々に手でつぶすようになり、Thが「あー、Yちゃん怪物が来たあー」と言う之余計に喜んでつぶすようになった。何度か繰り返すと自ら「爆弾だあー」「バヒューン」「ドーン」などの疑音を発しながら足で踏みつけて壊した。

この頃、来所当初は自分のことを女の子だと言っていたのが、「ばく男の子」と自覚できるようになった。

〔第10回 7月10日〕

この回は遊ぶ意欲はあったのだが、Yの体調がおもわしくなく、プレイは中止となる。簡単なカウンセリングのみが行なわれた。しかし帰り際、我々がp. r. から手をふると、車の中から名残悔しそうに手をふっていた。

〔第11回 7月17日〕

Coが不在のため、プレイセラピーのみ行なう。ThがMoと話をしていると「Yちゃん砂場で遊ぶんやで。」とか「あ、何か出て来た」などと言って、Thの気をひこうとする。Moが退室するのを待っていたかのように「行ってらっしゃーい。」と声をかける。

型ぬきをすると前回同様Thの型をたたいて壊す。が、前回程の激しさはない。Moが戻って来てプレイの終了を告げるが、「先生(Coのこと)が帰って来るまで待てるわ。」と遊びをやめようとはしない。Moが今日はCoが不在であることを説明するが、再び「待ってくわ。」と言い、なかなか遊びをやめようとはしない。Th

が再度終了を告げると、「Yちゃん、今日は自分で片付ける。」と、ままごとで使用した家を棚まで運ぶ。

〔第12回 7月31日〕

前回用いた家を使用するが、Thの家とYの家は明確に決まっている。人形も前回使用したものを覚えていて、Thには2体しか与えない。Thの家の屋根のしかけがとても気に入り、自分のではなく、Thの人形をそのしかけから落として喜ぶ。しばらくすると、そのThの人形を持って棚の方へ歩いて行き、大きな電車の車輪の所へ人形を置き、電車を動かして「死んだあー」と言う。Thは一瞬息を飲んだが、「痛いよー」と反応する。するとそれをおもしろがって何度も繰り返す。何かを発散したようなすがすがしい表情で帰って行ったのがとても印象的である。

〔第13回 9月11日〕

長期の休みの後でYがどのように変化しているか不安であったのだが、廊下から「Yちゃん」と声をかけると「キャー」と言って手をふって応える。p. r. のかぎを開けるのが待ちきれない様子で、p. r. の前をウロウロ歩く。前日の雷のことを話題にすると、電灯のおもちゃを使い「かみなりピカピカーゴロゴロー」と言いながらThの人形に雷を落とす。また電車を持ってきてThの人形をひく。Thが「痛いよー。えーん。」と泣くまねをすると、余計におもしろがってThの人形を全部ひいてしまう。

「夜ですよー」と自らが状況を設定し、Thが人形を寝かせると、「おーべーけーだーぞおー。」と脅しに来る。Thが「こわいよー」と言うと、その反応を楽しむかのように何度も行なう。

その後、「朝」という場面設定では、「洗濯物を干すねん。」と言ってThの人形を屋根の上に乗せ、しかけから落としたり、また自動車で体当たりをしたりする。長期の休みを経て、攻撃性は増大し、それにつれて発語数も増えた。

〔第14回 9月18日〕

Moが入室してそばにいと遊び始めるのをためらい、Moに「もう出て行って。」と言う。Moが「もう入って来んでいいねんね。」と言うとY「うん。」とはっきり答え、Moが「行ってきまーす。」と言うと、「行ってきまーす。」と繰り返す。Moに「行ってらっしゃいでしょ。」と言われて「行ってらっしゃい。」と訂正する。

ブラレールで遊び始め、線路だけでなくその周囲に、トンネル・駅・アーチ・植物・大阪城などを置いていく。Thがレールをつなげるのに苦労していると、「これで

しい。」とピースを持って来てくれる。電車を走らせる時には、Thに追いつかれないよう懸命に走らせる。しかし、Thが電車を走らせるのに障害物に手こずっていると、黙って手助けをしてくれる一面を見せた。

〔第15回 9月25日〕

今回はFaと来所する。アーチ部分の壊れた遮断機を持って「ここ壊れてるなあ」と、ThとFaに訴える。Faが「Yは家のん全部そんな風に壊してしまたやろ。」と言うと、Yは「でも学校のんは誰かが壊してあってんで。」と自分が壊したのではないことを主張する。Faが退室しようとする、Faの方へ駆け寄り、Faのポケットに手を入れ触れてから、「行っていいよ。」と言い、Moの時とは異なる行動をとった。

Faが退室すると再びブラレールに興味を示し、十字路を含む線路を完成させる。その十字路でThの電車に自分の電車を体当たりさせ、横倒しにして、とても喜ぶ。必ず十字路でぶつけられる様にタイミングをはかり、待ち構えている。Thが手で押さえていてもそれをはねのけ、強引に倒す。Thが「あーあ、お客さんけがしたわ。」と言うと、「お客さん死んでもたわ。」と言って笑う。プレイはとても盛り上がっていたのだが、Faが入室すると、パッとやめてFaに駆け寄り、密着する。

〔第16回 10月2日〕

砂場に山を作りその頂上にゴジラを立たせ、それを囲むように何体かのウルトラマンを置く。また箱庭で使用する家をいくつか砂の上に置き、「雪やでー。」と言いながら、屋根に砂をかけて完全に隠してしまう。駅などの大きな物から小さなバイクや人形まで、全ての物に砂をかけ、「かくしたった。」と満足そうに言う。その後MoとCoが入室すると、2人に「ぎょーさんかくしたってんでー。」と、誇らしげに報告をする。

(4) 第4期(17~22回)

〔第17回 10月9日〕

初めてYが「おうちで遊ぼうか。」とThに呼びかける。(今までは「おうちで遊ぶ。」というのみ。) 家や人形への執着は強いようで前回使った人形を各々、自分の物、Thの物と明確に分けている。Thの人形を車でひき、Thが「痛いよー! えーん!」と泣くと、「ほんなら病院に連れて行かなあかん。」と言って、布団つきのベットの寝かせる。が、もう一度その上から車でひく。それに飽きるとおぼけの人形で、「お〜ば〜け〜だ〜ぞお〜」と声色を使って脅す。またそれをThの家の中へ入れて家を揺らす。さらに「地震やでー。」と言いながら、Thの家を激しく揺さぶる。ThがそのまねをしてYの家を揺さぶるとムッとした表情をしてThの家を横

倒しにしてしまう。

またThが先に持っていた人形をとりあげて「これぼくの。」と主張する。Thが「これ、お姉ちゃんのん。」>と言っても「ぼくのん。」>と言ってきかない。もう一頭の犬を見つけて、「ほんなら、お姉ちゃんのんこっちにするわ。」>と言うと、再び取り上げて、しっかり腕にかかえる。そして「これぼくのん。お姉ちゃんにはこっちをあげる。」と小さな犬をくれる。しばらくするとまた小さなThの犬を、「これぼくの。」ととりあげようとするので、「これはお姉ちゃんのだからあかん。」>と少し強く言うと、しぶしぶ承知する。

その後、Thが猫を並べていると、大きな犬で「ガブー」とかみつ、「ねて死んだわ。」と平然と言う。Thが抵抗してもそれを許さず、家を横倒しにしたりする。砂場へ移ると前回のように家の模型に砂をかけて埋め、その上から水をかけて再出現を喜んでいる。

〔第18回 10月23日〕

Thがp. r. のかぎを開けると、当然という顔つきをして入っていく。初めは家を出しThの人形を犬にかませたりおぼけでおどしたり、車でひいたりという攻撃性をみせる。また、箱庭を川に見たてて砂をかけて濡れさせたりもする。箱庭にバケツいっぱいの水を入れるので、2杯目を禁止すると、しばらく考えた後、もっと水が自由に扱える砂場で遊ぶと言い出す。砂場では山の上に家を置き、その山をブルドーザーで削り、家を転げさせる。「台風が来たあー」と言って山の上から家を転げさせ喜ぶ。また、横倒しになっている家に、「バーン!! 雷が来た!」と言って攻撃する。

MoとCoが入室すると、名残惜しそうにする。体を二つ折りにし、ひざに頭がつくくらいまで曲げ、「どうもありがとうございました。」と、父親の故郷へ行って覚えてきたあいさつをしながら帰って行く。

〔第19回 10月30日〕

Thが家をとってやると「お人形はー? お人形はー?」と叫ぶ。Thが「ちょっと待って! お姉ちゃんのん置いてから。」>と制すると、静かに待っている。しかしThが人形のある場所を示しても、決して自分で取りに行こうとはしない。前回同様、Thの人形を車でひいたり、屋上から落としたり、家を揺らしたり、おぼけで脅したりというThの人形に対する攻撃性は顕著である。また「朝やでー」とYが場面設定をし、「Yちゃんとか朝ごはん食べてんねんで。」と言う。「何食べてるの?」>と尋ねると、「ハンバーグ」と答える。「へえーいいなあ」>「お姉ちゃんとか何食べてるん?」>「お姉ちゃんとかは、おみそ汁」といったような会話が何度かやりとりさ

れる。3度目くらいからは、YもThのメニューを聞いて「いいなあ」と言うようになる。

タクシーや消防車を走らせて遊びたいので、無理矢理Thの家を火事にする。そして屋上にいるThの人形をはしごで助けてくれるのかと思うと、バーンと下へ落とす。Yが「夜やでー」と言って全ての人形を家の中で寝かせるのに、1体だけ外に残っているので、それを教えてやると、「タクシーで帰んねん。バイバイ。」とタクシーのおもちゃに寄せ、帰って行く。あまりに鮮やかな去り方だったのでThも面喰ってしまった。

様々な方法で攻撃してくるYであるが、Thがせきこんでタオルで顔をかくすと、心配そうにのぞきこむという行動がみられた。MoとCoが入室するとすぐに遊ぶのをやめ、ドアの方へ向かう。帰り際Thがくさようなら>と言うと、しばらく間を置いてから「バイバイ」と両手をふり、後ろ向きに両手をふりながら帰って行く。

〔第20回 11月6日〕

Thが都合で遅れてp. r. に入室すると、先にCoとYがブロックで遊んでいたが、CoとMoが退室するや否やブロックを片付け、「家で遊ぶ。」と言う。しかし自らは全く片付けようとはせず、Thが片付けるのを待っている。Thが<Yちゃんも一緒に片付けよう。>と誘うと、ようやく黙って片付け始める。Thが人形の箱の中から自分の分を取り出そうとすると、Yがそれを遮り、「お姉ちゃんのはこれ。」と人形を手渡ししてくれる。人形がそろそろ「朝やでー。朝ごはん食べなあかん。今作ってる。」と言う。Thが<何作ってるのかなあ?>と尋ねると、「ハンバーグ。お姉ちゃんとは?」<やめし>「いいなあ」といったような会話が何度か繰り返される。水色の飛行機で最初は「ブーン」と飛んでいただけであったが、突然人形の頭上に「ガン」と言って落とし、Thの人形を倒す。また屋根の上にThの人形を乗せて「地震やでー。」と家をゆらして落としたり、床を川にみたてて溺れさせたりといった攻撃が続く。

おばけで脅す時は自分の家はきっちりして「Yちゃん所はきちんとしまっているから、おばけ入れへんねん。」と言ってからThの家を脅しに来る。自分の家を安全地帯として確保しておき、Thの家は「きちんとしまっているおばけは入れる」そうである。その他、ビー玉の爆弾や水攻め、火事など絶え間なくThの人形を攻撃する。しかしThが<あーあ、ベットが水びたしやわ。どうしよう。>とYに助けを求めると、「もう乾いたわ。」とThを助ける場面も見られる。しかしさすがにこれだけ攻撃を受け続けると、Thとしても少し苦しい時期であった。

〔第21回 11月27日〕

Faと来所する。Faが入室すると「何で遊ぼうかなあー」とぐるぐる歩き回る。FaがCoと退室するや否や、「おうちで遊ぶ。」と棚の方へ駆け寄る。遊び始めると早速、おばけで脅しに来るが、Thが<おばけは夜にならな怖くないねんで。>と言うと、少し考えてから「夜ー! 夜ー! もう寝なあかんねんで。」と言いThに人形を寝かせるように言う。その通りにするや否や、やはりおばけで脅しに来る。朝昼夜と設定が変わる度に必ず食事のメニューの尋ね合いが行なわれる。

Thの犬をYの犬の方へ近づけると「ガブー」と言うてかみつく。一度すると味をしめたのか「もう一回来て」とThに催促する。Thがそのようにすると再びかみつく。車でThの人形をひいたり、上から車を落としたり「地震」と言って家をゆすったりと激しい攻撃がみられた。Thが<明日のお天気大丈夫かなあ>と言うと「晴れ時々くもりのち…」と突然天気予報を言い出す。Thがあっけにとられていると、「天気はー? 天気はー?」と叫ぶ。Thが<今日のお天気は?>と尋ねると再びTVの天気予報のような調子で再び「晴れ時々くもりのち…」と支離滅裂ではあるがスラスラと話し出す。またサッカーをするというので見ていると、ゲームとしてのサッカーではなく、ボール遊びイコールサッカーとしかとらえていないのではないかと思われた。

〔第22回 12月11日〕

自分の取れる範囲にあるものでも「取ってー」と要求する。しかし、ThはYが取れる範囲のものは全てYに自分でとらせようと思っているので、Yが取るまで待つ。すると、しぶしぶながらもYがとる。Thが食事を<アムアム。>と食べるまねをすると、Yも「アムアム。」とまねをする。おはじきを持って「今からこのガラスで射ちに来んの。」と言う。<え? 今からお姉ちゃんどこに射ちに来んの?>「今から射ちに行きますよー」<射ちに来ないで下さい>「行きます」と段々大きな声になり、Thが拒否するほど、おもしろがってするようである。

またブランコを1人占めしようとするので、<5回で交代。はい、1回2回…5回交代>とThとYの人形を入れ替えると、最初は怪訝そうな面持で見ていたが、2、3度くり返すと納得した様で一緒に「1回2回…5回」と数える。勝手にThの家を「火事やでー。」と火事にしてしまい、「ドッカーン! パーン! モクモクー!」と火事の様子を表現する。Thが<すっごーい!>と驚くと、誇らしげに「みな、どないなった?」と尋ねる。<みんな、こけたわ>と答えると満足そうである。突然

「でんわき。」と言い出す。Thがくももしし>と言うと「今からお水かけに行くわな。」と言い出す。そして水をかけに来る。Thがく戸からお水を出してるから大丈夫やもん。>などと言うと、余計に強く、大きな声で「ジャー!!」と言いながら水をかけるまねをする。

またThがくおばけ出えへんように閉めた!>と言うと、何度も「お～ば～け～だ～ぞお～」と脅しに来る。「変なゴミ箱って言うて」と催促するのでく変なゴミ箱>と言うと、また「お～ば～け～だ～ぞお～」と脅す。自らがThを攻撃するために、このようにわざと強要して言わせる言葉が今回は多い。他に例えば「牛に電話して。」と言うので、くももしし牛さんですか>と電話すると「今から頭をたたきにいくな。」と言い、Thがく痛いから来なくていいです。>と言えば、余計強烈にThの人形をかんだり（Yの人形にかませるのであるが）踏んだりする。その他「帰ってよって言うてみ。」「屋根に登ってって言うてみ。」と言ってThがその通り言う、必ずThの人形は攻撃される。Thがく痛くないもん>と言ってYの攻撃を否定すると、余計にひどく攻撃する。

はしごに乗って空中を飛んでいるYの人形をくわー!! ジェットコースターみたい>と言うとうれしがたり、何度も同じことをくり返す。本物のジェットコースターのようにはしごを宙返りさせたりしながら、Thが称賛の声を上げるのを待っている。もし言わないと「ジェットコースターみたいって言うてみ。」と言うことを強要する。

終盤はずっと「やまのじい」を連呼し、Thがそれを怖がると何度もくり返し言ってThの反応を楽しんでいる様であった。この日はYの人形をすべてThの家へ持って来て、Thの家で遊ぶこともあった。しかし2組の人形が仲良く遊ぶ、というのはまだ見られない。

II. 考察（次の表に基づいて考察する。）

＜1＞ 母子分離について

(1) マーラー¹⁾の分離・個体化理論

マーラー¹⁾は「分離・個体化の過程」を分化期・練習期・再接近期・リビドーの対象恒常性への途上期の4つに分け、「歩行能力や他の自律的自我の成熟的加速がおこっている時に母から離れて機能するための情緒的準備性が遅れている場合、生体的パニックを引き起こす」という仮説をたてている。この仮説に基づき、本ケースでの母子分離不安を検証する。

1. 分化期

個体化と分離とは互いにかみあひながら前進後退をくり返して発達するが、母親の側に何らかの形で子供の

分離独立への機制を邪魔しようとする要因のある場合には、子供の成長発達に何らかの支障をきたすものと考えられる。

本ケースの場合、母親はYの独立への機制を邪魔しようとは思ってはいなかったであろうが、事あるごとに病院通いをしなければならなかったYと母両者の病弱さが、結果的には独立への機会を失うことになってしまったと考えられる。

2. 練習期

この期の母親は安定した基地のような存在である。基地が安定していないと、子供は他へ注ぐべきエネルギーを母親へ注がねばならず、情緒的な発達を欠くものと考えられる。

本ケースの母親の場合、高齢出産であったがゆえの自らの体調への不安、そして何よりも周囲の「年寄りの子供はダメになる。」等の声に惑わされ、自分の「母親」という役割に対する不安が微妙に表情や態度に現れ、それをまた子供が敏感に感じるとするという悪循環がみられた。母親の不安が子供の外へのエネルギーを奪いとってしまったものと考えられる。この悪循環をたち切ることが本ケースの大きな目標であると言える。

3. 再接近期

この期には対象（つまり母親）が自分の一部ではないことがわかり、対象を失う怖れではなく、対象の愛を失う怖れが次第に明らかになる。子供の側から言えば、自分の愛する対象が個々の個人的関心をもった独立した存在であることを次第に理解し始め、しばしば母と劇的な争いをする中で、自分の万能感を徐々に痛みを持って放棄しなければならない。この時期の子供の自律自我が最善の機能力を発揮するためには、母による安定した情緒的なうしろ立てが必要である。それはその後の子供の成長に大きく貢献するものである。

またこの期に起こる再接近危機の特徴は、母を自分の延長として使う行動である。一般的には不満で食欲でかんしゃくを起こしやすい傾向があり、母を追いやったり逆にしがみついたりと両傾向がみられる。この再接近危機の固着が分離不安を深めているともいえる。その後、防衛機制の一つでもある、良い母と悪い母との分裂も始まる。これはその後の言語の発達、内在化の過程、象徴的な遊びを通して自分の願望や空想を表現する能力の進歩などから個人的なパターンを獲得し、母との最短距離を見出すようになる。

本ケースの場合は、まさに再接近危機の状態にあり、その固着が明白であった。またYは対象の愛を失うかもしれないという怖れから、称賛や叱責にはひどく敏感で

あった。

4. 個体化の確立と情緒的対象恒常性の始まり

本ケースの場合、Yはこの第4期へは達していなかったように思われる。再接近危機の固着により対象恒常性は獲得されていなかったのではないかと考える。もし、一時的に獲得されていたとすれば、それはベビーホテルでの一件などからYの分離への恐怖が増大し、母不在への不安から逃れるために対象恒常性が働き始めたとも考えられる。しかし、Y自身に確固とした自我の成長のみられぬ時点では、それは退行へと動き、再接近危機の固着へと結びついたのではないかと著者は考える。Y自身が拒否している分離と個体化の進行を促すことと、母子共に抱えている不安の悪循環をたちきることが、このプレイセラピーの目的であったといえる。

(2) 本事例の母子分離と個体化

A. 第1期

第1回のプレイセラピーは父親も共に来所した事もあり、入室をためらうことはあったが、想像以上にスムーズに遊び始めた。最初はTh, Fa, Yの3人で遊び始めたことがYの緊張感と警戒心を弱めたと言える。途中でFaが遊びの輪から抜け、カウンセリングに加わった時もYは特別な反応は示さなかった。しかし常に目の端ではFaとMoを追っていて、新しい物(Th, おもちゃなど)に対する興味を抱きつつも、見知らぬ場所での不安感は隠せなかった。

第2回ではThも驚くほど素直に入室し、遊びに対しても意欲的であった。しかし、部屋の隅にいる母親の声をバックに安心感を抱いていると見受けられた。母親とのおよそ2mの距離が彼の分離の第一歩であったといえる。

第3回では初めて母親の退室を試みる。当初はこの試みができるようになるほどプレイに熱中するだろうか、という不安もあったが、思ったよりも早く実行することができた。プレイ開始後30分でMoが「おしっこ行くから待っててくれる?」と退室を告げる。この言葉には現実味があり、また短時間で必ず戻って来ることをYに期待させる言葉である。我々(Th, Co, Mo)はYがどのような反応を示すか緊張して返答を待っていたのであるが、我々の予想に反して彼はニコニコしながら「うん、待っててあげる。」と言ったのであった。Moが退室後もパニックなどの特別変わった様子もなく、ただ時折顔をあげドアの方をチラッと見るだけで(5分間に5回程度)、MoとCoが入室してもうれしそうな表情は見せるものの、Moに走りよったりすることもなく、我々の予想は完全に裏切られたと言える。これを期に我々は、

早期の母子分離が可能になると期待をした。

B. 第2期以降

第4回でYは自発的にMoから離れ遊びに取り組み始める。Moが同室にいることは意識してはいるものの、遊びの中で直接母親を意識することは全くない。

第5回では、プレイ開始後30分してMoが「Yちゃん、ちょっと行ってくるけど、いい?」と声をかける。しばらく沈黙の後「いいよ」と返事をする。この時は退室の理由を明確に言わなかったためか、しばらく沈黙があった。その間、彼は彼なりに考え、このプレイの場は彼にとって少なくとも安全で楽しい場所であること、必ずMoが帰って来るであろうことを理解したのではないだろうか。またMoの退室中に初めて声を出して笑い、遊びに熱中していることを示している。と共に、ThはYのThへの安心感の高まりが感じられた。またこの回ではMoが再入室すると、明らかに歓迎の表情を見せていた。

第6回ではプレイの最初からの母子分離を試みる。が、これをYは拒否し、Moの手をとって入室を促す。しかし10分後、Moが「Yちゃん、お母ちゃんちょっと行ってくるわね。」と告げると、驚くほど大きな声で「あーい」と返事をし、再び遊びに熱中している。Moが入室をしないで分離を告げた時は、まだ関心はもっぱらMoに向けられていた。しかし10分後遊びに夢中になり、前回の経験からMoが必ず戻って来るという確信を持ったので、彼は何のちゅうちょもしなかったであろう。

第7回ではプレイ開始後約5分でMoとCoが退室する。「ちょっと散歩に行ってくるわね。」というCoの言葉にも「はい」と答え、我々を安心させる。MoとCoの退室を告げる言葉よりもすでに興味はプラレールの方へ向いていた。この頃から遊びも活発になり、Thとの会話も増えた。

第8回ではプレイの初めからMoが退室を告げるが、まるでそれがあたり前であるかのようにイエスの返事をする。p. r. にMoがいないことが当然であるかのように、Moが不在であることを気にする様子はない。遊びを楽しむ余裕と共に、p. r. に対する安心感、Moが必ず戻って来るという経験に基づく確信、つまりは基本的信頼感が芽生え、プレイ場面での母子分離に成功したと言える。

以後はプレイ開始前にはMoは退室し、何らかの事情でプレイが始まってもMoがp. r. にいる場合には「追い出し」たり(第14回)、故意になかなかプレイに取り組まないなどの行動がみられた。これらのことからYはp. r. を完全に自分とThの2人だけの共有の場とみな

していることがわかる。

Yはこれらの経験により基本的信頼感を得、少なくともブレイ場面での母子分離は当初考えていたよりも早い時期に成立した。しかしこれがその他の場面でも可能であったかと言えばそうではない。一歩外へ出れば、彼にとって安全な場所や人ばかりではないのだから。とはいえ、Yは対人関係（大人にも子供にも）においては、わずかながらも確実に成長していたのである。例えば電車の車内でYと会った時、Thの「こんにちは」という言葉に対し全く反応をしなかった。しかしその日、ブレイルームではいつもと変わらぬ快活さを見せた。これは電車の中はまだ彼にとっては安全でないためであり、周囲は見知らぬ人（彼にとって安全かどうか定かではない人）ばかりであったためと考えられる。しかし、春から通うことになっている幼稚園に見学に行った時には、誘われた散歩に尻ごみもせずについていき、全く母親のことを顧みなかったり、父親の故郷へ行った時も、母親を残して親せきの人と買い物に行ったり（母親の話より）と、対人関係でもかなりの進歩をみせている。ブレイ場面での分離の経験が実生活でも応用されている。

＜2＞ Yの自我発達について

(1) Yの自我発達段階に対する仮説

自我の発達はマラー¹⁾、クラインらの対象関係からみると次の表1のようにまとめられる（斉藤²⁾）。ここで表1に沿ってYがブレイセラピーを受ける前の自我の発達段階について考えてみることにする。

以前のYは分離が原因で自家中毒を起こす程、母子分離に不安を持っていた。この不安は母親が再び戻って来ることを予期できない不安、つまりは対象喪失不安であったと考える。また彼は母親（対象）を理想化し、良い面しか認めていなかった。そして自分が何でも一番であるという「壮大な自己像」を描いていた。母親と自分を「自他一体的」と考えて、そこから成長することができず、つまりは「分離個体化」に問題点を持っていたのではないかと考える。

(2) Yの自我成長への課題

ユングは「幼児の生活においては、自我はほんのわずかな役割しか演じていない。」が、「衝動や無意識的な空想表現と密接に関連している」自我は、「強力になるにつれて精神生活を組織化したり、統御したりする方法を展開するようになる。」³⁾と述べている。またエリクソン⁴⁾は、自我の成長は基本的信頼感を得て、自律することであるとしている。フォーダム³⁾は「分析家が子供自身に内在している自我構造の中で、統御的な自我というよりはむしろ補償的な自我としての役割りを演じる。」

こともあると述べている。

これらのことから、このブレイセラピーでの自我発達の課題は、まずYが基本的信頼を得て自律することであり、Yが「統制的な自我」を発達させることである。その過程で、「万能的自我像への徐々の幻滅」をYが感じる時には、セラピストがYの自我の中の「悪」の対象となり、「補償的な自我」としての役割を演じていくことになる。以下はそのプロセスである（表2参照）。

(3) ブレイの中での自我行動

1. 第1期

第1回の初めてのブレイセラピーでは、Yはp. r. という見知らぬ場所、ThやCoといった見知らぬ人間に対し、警戒心を強める。p. r. には入ろうとせず、父親の手をずっと握りしめ、「父や母とは絶対に離れないぞ」という決意を見せている。これが通常のブレイセラピーのように母子を分離してp. r. に連れて行こうとしても必ず極端な恐怖を示したであろうことは、容易に想像できる。

第1期では何で遊ぶか、どのように遊ぶかは問題ではなく、いかにこの場（p. r. ）に慣れるか、またThに慣れるかが問題である。第1回の遊びはFaが導き、Yの興味をひきそうなものを次々に提示していき、様々なおもちゃを出した。特に箱庭に興味を示し一番長い時間遊んでいたが、その中でThとの会話は「これ何？」であった。これはYがThに対し少し警戒を解いたことを意味すると思われる。しかし箱庭ではまず白や緑のさくで場所を囲み、心の中をのぞかれることを防衛している。

第2回では場所に慣れたせいか、来た早々「今日はいっぱい遊ぶねん。」と意欲を見せる。子供がすぐに遊びにとりかかることは、Thとの関係作りを拒否する行動の場合があるというアレソ⁵⁾の意見もあるが、この場合では純粋な気持ちで受け止めたいと思う。また箱庭では前回同様さくのまわりを囲み、木を置く。まだ心の内を探られるのは拒否しているが、Thに対してはゲームで占領していたボタンを1つゆずるといった行動、また箱庭の上の方の棚にある物を、だっこして取れる位置にあげてやると、2回目からはだっこを要求するなど、YがThに対し優位な立場にあり、ThがYの意志で動かせる人間であることを理解し、2人の関係づくりに参加しようという意識がみられる。しかし、まだY自身から積極的に加わるのではなく、Thの働きかけがあってからである。

第3回ではThが空気入れに熱中していると、その間に戸だなから「へび」を探し出してきてThをおどして箱庭の中へ置き、それで箱庭の遊びは終結する。この場

表 1. 自我の発達段階 (斎藤³⁾1981より)

発達段階	全般的自我発達 エリクソン、レヴィンジャー	対 象 関 係 マラー、スピッツ、クライン他	不 安
口愛期 (0歳～ 1歳過ぎ)	乳児期 基本的信頼* (VS. 不信) [希望]**	自閉段階 「正常な自閉段階」 「3カ月微笑」 (社会的) 共生段階 「共生期」 「8カ月不安」(人見知り) 「抑うつ態勢」	壊滅不安 対象喪失不安(予期不安) 愛情の対象喪失不安
肛門期 (8, 9カ月 ～3, 4歳)	幼児期 自律 (VS. 恥, 疑惑) [意志]	衝動段階 「イナイナイバー」 自己防護段階 「分離個体化」	処罰不安(去勢不安)
小児性器期 (男根期) (3, 4歳～ 5, 6歳)	率先性 (VS. 罪悪感) [目的性]	遵奉者段階 「エディプス・コンプレックス」 「超自我形成」(同性の親 との同一化)	自我理想の形成
潜在期 (6, 7歳～ 12歳頃)	児童期 勤勉 (VS. 劣等感) [有能性]	(良心的 遵奉者水準) 交友 集団・仲間・徒党行動 性役割習得	

合、YはまずThがYに背を向けて他のことに熱中したことで、同じ場所にいるにも関わらず、自分(Y)に関心を向けずにThが存在しているということを初めて体験したのではないだろうか。それで何とか自分の方に注意を向けようと、へびを見せておどかしたのではないかと考える。このことがThとYの関係を一步深めたような気がする。

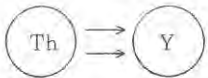
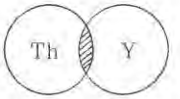
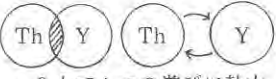
またこの回には初めて5分間の母子分離を試みるが、特別なパニックも起こさずに成功する。これは、Yがp. r. は安全な場所でThが安全な人間であることを認識

したためではないかと考える。

2. 第2期

第4回では、Yが砂で山を作っている横でThが他に山を作り始めると、YはThの行動を意識しながらも、自分の作品に熱中する。これはThとYが砂場という空間と、安心して遊びに熱中するという感情の共有を示すものと考ええる。また、Yは同じ青いくまでしか使わないといった自分の物に対する執着を見せ始める。物に対する執着は以後22回までずっと続き、「自分の物」と「他人の物」との区別が明確になっている。私生活でも「目

表 2. 遊戯療法におけるYの自我成長と母子分離の過程

	ThとYの関わり方	Yの自我行動	Yの共感性	母子分離の様子	主な遊びの内容
I 期 (1~3回)	<ul style="list-style-type: none"> ThのYに対する一方的導入的な遊び 	<ul style="list-style-type: none"> 箱庭における「へビ」の出現 		<ul style="list-style-type: none"> 5分間の分離(第3回) 特別なパニックなどは起こさないが、ドアの方を気にしている 	<ul style="list-style-type: none"> 箱庭「へビ」の出現(3回)
II 期 (4~7回)	<ul style="list-style-type: none"> 心理的なつながりの形成 	<ul style="list-style-type: none"> 物に対する所有欲 		<ul style="list-style-type: none"> 徐々に分離の時間をのばす 分離中は遊びに熱中するようになる 	<ul style="list-style-type: none"> 砂遊び 水遊び
III 期 (8~16回)	 <ul style="list-style-type: none"> 2人で1つの遊びに熱中 Yに主導権のある遊び 2人である中での1人遊びなど様々な形の混合 	<ul style="list-style-type: none"> 所有欲 砂でものをかくす 攻撃性 <ul style="list-style-type: none"> Thの人形、電車、作品、家 Thの反撃を許さない 	<ul style="list-style-type: none"> 遊びの中での思いやり行動(遊び=虚構) 	<ul style="list-style-type: none"> 最初からの分離可能 	<ul style="list-style-type: none"> 電車ごっこ 砂あそび <ul style="list-style-type: none"> 人形や家を並べる 砂をかけて隠す 家を使っでの遊び
IV 期 (17~22回)	<ul style="list-style-type: none"> 2人である中で、1人でいられる能力 共同遊び、共同やりとり 	<ul style="list-style-type: none"> 所有欲 攻撃性 <ul style="list-style-type: none"> Thの人形、家 	<ul style="list-style-type: none"> 遊びの中では攻撃性を示すが、現実場面では、Thをいたわる行動が出現 	<ul style="list-style-type: none"> 分離可能 <ul style="list-style-type: none"> 現実場面でも母子ともに 	<ul style="list-style-type: none"> 家を使っでの遊び

分の物」に対する執着は強く、おもちゃでもなかなか他人には貸さなかった。セラピーの場面でもThがYの物を使うと明らかに嫌がり、Thの手からひったくるという行動が見られた。

また砂の上に水をこぼすことに興味を示し、最初は恐る恐るであったのが、時間がたつにつれて大胆になり、初めはスコップからであったのが最後にはバケツから直接こぼすようになり、顔の表情がみるみるうちに明るくなっていくのが観察された。心の中に抱えていた不安などのモヤモヤしたものを一気に解消したように見られた。

第5回では、ThとYのやりとりが一つの流れを持つようになり、第6回では偶発的にはあるが、Yからの

働きかけでプレイが進行するようになった。また第7回では、連続したやりとりの中でThが真剣に悩めば、Yがそれに呼応しThを助けたり(プラレールの線路をつなぐ時)Th自身が遊びに熱中している姿を見ることでYも遊びに熱中し、母との分離中にも母を気にかける様子は見られなかった。

プラレールの遊びの中で2人が真剣に競い合い、お互いに負けないように電車を走らせると、Yは必ず自分が勝てるようにThを指示する。Yは絶対に負けたくないという意思表示をし、絶対に自分が一番にならないといけないと思こんでいる様であった。

箱庭には全く興味はなくなり、砂遊びや水遊びなどの

ネィティブなものが多くなり、Yがストレートに自分を表現できるものが多くなった。自らが作った作品を水をかけて全部壊してしまい、それでもスッキリとした顔をしている。Yの内にあった不安や恐怖を水できれいに流してしまったようである。

3. 第3期

第3期からはブレイの場では完全に母子分離が可能になり、p. r. はThとYの2人だけの空間になる。第8回では主に砂遊びを好み、中でもトンネル作りに凝る。物を出したり入れたりするトンネルは、現われたり消えたりする母子関係を少なからず意識していることを示したように思う。母親に「いってらっしゃい」は言えても、心の底では母親を意識していたのではないだろうか。

第9回では、これ以後の遊びの中心となる攻撃行動が出現する。この回以降、回を重ねるごとに攻撃性はエスカレートしていく。「攻撃性」のとらえ方はその治療者によって、またそのケースによって様々であるが、ここではポジティブな感情の発露であると考えたい。

アクスクライン⁶⁾は「子どもの側で、この手段、あの手段というように真実の自分になろうとして攻撃的な手段に決めたり、完全な自己表現を妨害するものに激しく抵抗しているように見える、一見不適応と言われている状態を作り出すのも、自己実現や成熟、充足、独立などへ向うのと同じ内的動因である。」と述べている。YはThに悪い自我を投影し、自分もまた悪者（Yちゃん怪物）になって、縦横無尽に悪をやっつけた。そして攻撃することと、攻撃してもとがめられないことを味わった。これはYの自我の芽生えともいえるべきものではないだろうか。

また攻撃性はどんどんエスカレートしていったが、一方で遊びの中での思いやりの行動が見られた。第14回では交差点で待ちぶせしてThの電車を倒すことに一生懸命である一方で、Thの電車が脱線すると黙ってなおすのを手伝ってくれるという行動がみられた。自分が遊ぶことで精一杯であったのが、他者の行動までを視野の中に入れ、手伝えるようになった余裕が感じられる。

この期ではYが主導権を握り積極的に遊びを始めるという姿勢が目立った。また2人で1つの遊びに熱中し、かわす会話の数も増え、声も大きくなっていき、ThとYの関わりの深まりが感じられた。

4. 第4期

第4期には攻撃性はますますエスカレートしていった。Thの反撃は全く許されず、息つく暇もない程、Thの人形や家は痛めつけられた。しかし第3期の攻撃性と異

なる点は、第4期では「制限」が設けられたことである。

制限の持つ意味としてアレ⁵⁾は次のように述べている。「子供に制限を与えることもこれが子供を助ける意味のものならば単なる束縛や否定とは大いに違う。それはひとつの人間関係を基礎づけるものであり、現実を生かすものだとも言える。真の制限は状況の中に生れ、また状況に属する物であり、決して治療者の個人的な希望や治療者の命令などから生れるものではない。自然に生れる制限をはっきりと否定し、それに子供を直面せしめ、それに対する彼の感情を表現させるべきである。」

この場合の制限は所有物に対してであった。第17回にThが所有していた犬の人形をYはとりあげて自分のものにしてしまう。それを2度くり返し、3度目もThが所有の意志を示した人形をとりあげようとする。そこでThはYに対し、セラピーの中で初めて「ダメよ。」という言葉を発した。制限を現実を生かすものとするならば、この先、彼は集団生活の中でこのような制限を体験するであろうし、ThとYの人間関係から言えば、YはThがイエスマンであるばかりではないことを知ったであろう。

アレ⁵⁾はまた次のようにも述べている。「制限といっても彼はこれを知り、それに依存しているのであって、かえってこの制限によって彼は自由に攻撃力を発揮した。彼は決してこの制限に屈服する必要はない。治療者が何らかの制限をすると、子供はかえって助かったという様子を示すものである。」

Yは自分の攻撃性にもストップがかかることを知り、より一層攻撃性を発揮するようになった。彼は攻撃の限度を知り、そして攻撃は虚構の世界（遊び）の中だけのことであることを知るのである。第19回でThがせきこんで苦しんでいると心配そうに顔をのぞきこむという行動がみられた。明らかに彼は攻撃対象の人形や家は「悪」であるがTh自身は「良いもの」としてとらえているのである。

遊びの中で特に印象的だったのは、第18回に模型の家を砂山の上に乗せ、その山をブルドーザーで削り、家をがけから横転させたことである。最初彼にとって家は、必死で守らなければならないものであったことが、箱庭の白いさくから想像できる。その後彼は家を砂で隠してその上から水をかけて遊ぶということを好んだ。これは一旦家が視界から離れても、再び現れるという期待を含めたYの経験による理解が感じられる。その後今度は家を転がすまでになり、彼にとって家、つまり家庭は、転がしたり倒したりしても揺るぎないものになっていることがわかる。これは母親が自分の視界から消えても動揺

しない時期と一致しており、母子の成長がうかがえる。

また第16回から18回の遊びでは砂遊びが主であったがThはほとんど手を出すことなくYは一人で遊んでいた。これは「2人でいる中で1人でいられる能力」に関係すると考える。ウィニコット⁷⁾は1人でいられる能力の確立に寄与する基本的な体験は「幼児または小さな子供の時母親と一緒にいて一人であったという体験である。」と述べている。Yはこのプレイセラピーを始める前は「母親と一緒にいて一体」であった。しかしこのプレイの場面ではThと「一緒にいて一人である」ということを体験する。またウィニコット⁷⁾は「幼児が自分独自の生活を発見できるのは、(いわば誰かと一緒にいて)一人である時のみである。」と述べている。プレイにおけるこの体験がYの独自性を育てることになったのではないだろうか。

第20回を過ぎるとYは会話での遊びを好むようになる。また攻撃性の合い間に、朝食などのメニューを尋ね合い人形に食べるまねをさせるなどの建設的な部分が表われ始めた。自分で状況を設定し、それを展開させていくことを好むようになり、一日のスケジュールを決めたりしながらY自身で遊びを進めていく。

また、自分の家はきっちりと閉め「Yちゃんの家はちゃんとしてあるからおぼけは入って来られへんねん。」と言いながらThの家を攻撃する。これはThの家をYの代理つまり「悪」の対象とし、Y自らが悪者になりそれを痛めつけていたように思われる。Yはここで自分が悪者であることと、他方では家を守っている良い者であることを体験する。彼は自分の中の両面性に気付き、それが相反するものではなく、両立するものであるということが理解できたのではないだろうか。その体験は、Yに自我のコントロールをさせる力となり、自己を確立させる原点になっているのではないだろうか。

(4) 自我の成長度

Yはこれまでのプレイの中でいくつか自我発達に関する行動を示している。彼は第3回から始まった母子分離の試みにより対象(母親)が必ず戻って来るということを経験し、少なくともプレイの場面では対象の喪失不安を解消し、母親との間に基本的信頼を築いた。そして分離ができるようになった頃からThに対する攻撃性がみられるようになった。この攻撃性の対象であったThはYにとっては分離して初めてわかった母親の悪い部分であったように思う。その悪と、自分が家を守る良い者である(第22回)という両面を認めて、彼は自我をコントロールできるようになっていくのだと著者は考える。

その伏線となったのは、プラレールでの追いかけご

こ(第5回)であったように思われる。彼はここでThに負けてしまう自分を知る。それは彼が今まで味わったことのないものであった。今までは自分が何でもでき、何においても一番であると権力を誇示していたが、Th相手ではそうはいかなかった。このことからYは徐々に自分の万能感に対し幻滅していくのであろう。しかし負けてしまう自分を自分の中に抱えこんでしまうことはYにとって非常に苦痛となるので、その苦痛をThに投射し、Y自らはその苦痛を攻撃することで、少しずつ自我をコントロールしていくことができたのではないだろうか。

またThの制限に対しても、それに対する拒否反応はみられず、制限を理解し行動している。これは自分の欲求を押さえるという「自我理想の形成」の第一歩ではないだろうか。このように自我をうまくコントロールできれば、2歩3歩と自我理想の形成に近づくことが期待される。

ところで、自己は「自我の活動によって変化するものであり、逆に自我もまたそれによって増大するものであることが明確になってきた。」とフォーダム³⁾は述べている。Yの場合、分離が可能になり攻撃性が増してきたところ、今まで「女の子」と言っていたのが、「ぼく男の子」と性差を認識したり、「自分の物」に対する所有欲をみせたりした。明らかに自我の成長により自己認識の芽生えがみられる。今後ますますYの自己概念の形成が発達することが期待される。

文 献

- 1) Mahler, M., Pine, F. & Bergman, A. : The psychological birth of the human infant, LONDON : Hutchinson. (1975)
- 2) 斎藤久美子, : 乳幼児期と児童期における自我・自己の発達, 中西信男・幹八郎編 : 心理学10自我・自己, 有斐閣双書 (1981)
- 3) フォーダム, M. 浪花博・岡田康伸訳 : 子どもの成長とイメージ, 誠信書房 (1976)
- 4) エリクソン, E. H. 小比木啓吾訳編 : 自我同一性, 誠信書房 (1976)
- 5) アレン, F. H. : 問題児の心理療法, みすず書房 (1955)
- 6) アクスライン, V. M. 小林治夫訳 : 遊戯療法, 岩崎学術出版社 (1972)
- 7) ウィニコット, W. 牛島定信訳 : 情緒発達の精神分析理論, 岩崎学術出版社 (1977)

(昭和63年10月11日受理)

Summary

A case of playtherapy for 4-year-old boy, who showed extreme separation anxieties, was reported in this article.

The mother was delivered of him at 49 years old, and he was born with high risk conditions (as a premature and a low birthweight infant). Parents were in great anxieties his physical and mental development. It can be considered that his sympathy with their anxieties might lead him unsecure mental state. In other words, parents especially mother and the child had been kept in symbiosis relationship.

We thought that separation from the mother was his most important goal at this stage. In order to have his ego developed, therapist intentionally began to make symbiosis relationship with him (the 1st stage), then take the role of badly side of his ego (the 2nd stage). At the 2nd stage he showed aggressive behavior so much. After these aggressive sessions, he could play with other children in mother's absence that suggested the develop of his ego and the separation from the mother.

The process of playtherapy was discussed within the framework of Mahler's separation-individualization theory.